

小児病棟のプレールームで

―遊びボランティアのこと―

河野優子

数年前、大学の先輩からボランティアへのお誘いをいただきました。それは、ある大学病院の小児病棟での遊びボランティアでした。ボランティアアとはいえ、病氣と闘っている子どもたちと接するのですから、責任の重い仕事です。不安も大きかったです。機会を与えていただいたことに感謝をして、参加しています。ただ、現在は年に数えるほどしか参加できず、本当にお手伝いをし

ているにすぎません。そんな私が病棟の中での「子どもの居場所」について文章をつづることは、戸惑いとためらいを覚えています。どうか、遊びボランティアの活動についてのご報告とお読みいただければ幸いです。

この遊びボランティアは、「病氣と闘っている子どもたちに、病棟でものびのびと遊ぶことのできる育ちの場を」という小児科医と、大学の児童

学科の同窓会の会長とのご縁で始まりました。ボランティアのスタッフは全員この児童学科の卒業生です。活動は火曜日と木曜日の週二回、午前中の二時間です。スタッフは現在十三名おり、ローテーションを組んで、各回二名ずつ参加しています。

スタッフは、連携を取り合いながら活動をしています。活動を終えたスタッフは、その日の活動を次回のスタッフに報告します。来室した子ども様子や活動の内容、次回への子どもたちの希望などを伝えるのです。その日の活動で気になったことや注意事項を伝えることもあります。

次回のスタッフはその報告を参考にして、二人で相談をして当日の遊びの用意をします。見本の作製、材料の準備などです。来室する子どもたちのことを考えながらする楽しい作業ですが、長期の入院をしている子は手芸や工作の腕も上がり要

求水準も高いので、毎回頭を悩ませています。ですから、日ごろから「これは子どもたちが喜びそう、遊びボランティアで使ってみよう」と思うものにアンテナを張っています。また、プラバンやアイロンビーズ、ビーズ手芸などは子どもたちに人気のある定番の遊びですが、そうしたものの材料の補充も欠かせません。

当日を迎え、お揃いのエプロンを着けて、工作や手芸の材料や道具の詰まった大きなバッグを持って、プレールームへ。

「おはようございます」

と声をかけると、子どもたちが、

「おはよう」

「今日は何があるの」

と迎えてくれるのがうれしい、出会いの時でもあります。

そして、「今、ここで、新しく」活動が始まり

ます。

活動にあたっては、次のようなことを心がけようと話し合っています。

子どもの内から生まれるものを尊重し、

育てる

入院中の子どもたちは、受け身にならざるを得ないことがたくさんあります。そのような中で、この遊びボランテシアの時間は、子どもが自発性を発揮できる場でありたいと願っています。子どもの自発性を重視し、子どもが自分で選択する、自分で決定するという場面をなるべく多くもつようにしています。何をしたいか、何をしたいかわからない場合もあります。そのような時には用意してきた遊びを提案しますが、大人が主導して「これをしましょう」と押しつけるのではなく、その子がしたいものが見つかるまで「待つ」

ことを大事にしたいと

思っています。

また、来室するさまざま

まな子どもたちと向き合

いながら、今日の子の心や体の状態は、ということを考えるように努めています。今、その子の育ちにとってどのような働きかけが必要なのか、を見極めたいと考えています。

子どもの「できた!」「うれしい!」

「おもしろい!」を目標す

子どもたちは、病気と闘うために、病院でさまざまな経験をしています。病棟で日常を過ごすことそのものが子どもにとっては大きなストレスだと思えますし、病気そのもの、また治療に伴う痛みや辛さも多く感じていることでしょう。遊びボランテシアの時間が、私たちからは察することし



かできない、そんな心身の痛さや辛さを少しでも忘れられるひとときとなるように、と願っています。

そのために、子どもたちが「できた!」という達成感や「うれしい!」「おもしろい!」という充実感を十分に味わえるように、遊びの内容も準備の段階から工夫するようにしています。

また、子どもたちは、自分のために工作や手芸をするのはもちろんのことですが、家族や友達や医療スタッフのために、と、よくプレゼントを作ります。

プラバンでストラップ、ビーズでアクセサリやミサンガ、アイロンビーズでルームプレートやイニシャル、手作りのカード、絵、小物入れ、……数え上げればきりがありません。編み棒の持ち方すら知らなかった子が、編み方図を読めるようになり、お姉さんの生まれてくる赤ちゃんの

ために靴下を編みたい、と言ったことがあります。編み方図を探して次回に渡すと、うれしそうな笑顔が返ってきました。また、絵の得意なある子は、描いた絵をプレゼントするのにどんなラッピングにしようかと真剣に考えていました。贈る相手と、描いた絵を大切に思う気持ちにあふれていました。

病気と闘いながらも家族や友達を思う子どもたちの気持ちの尊さを感じながら、私たちもできあがりを楽しみに、一緒に時を過ごします。

「あるがままの姿でいられる空間」を

創り出す

病院でさまざまなお抱えの子どもたちにとって、遊びボランティアの時間と空間が、あるがままの姿でいられる場であるように、と願っています。

プレールームには来室したものの、遊びたくなかったり、ボランティアの用意した遊びに気が乗らなかつたり、また、何をしたいか見つからなかつたりということがあると思います。そんな時には、遊ばなくてもいいし、違う遊びをしてもいいし、「これはいや」と言ってもいいと思っています。まず、子どもたちは時には、家族や医療スタッフには見せない顔を見せることもあります。だだをこねたり、愚痴を言ったり、泣いたり甘えたり、子どもたちが「本音を出せる場」でありたいと願っています。

ボランティアのいろいろな提案をすべて「いや」と言いながら、拒否することを楽しんでいた子がいました。また、体を紙テープでぐるぐる巻きにしてもらって、それをびりっと破って「僕は強いぞ(病気になんか負けない)」という遊びを何度もしましたが、子どももいました。また、ある子ども

は、仲良しの友達が退院する日、二人の子どもの絵を描き、「お友達と自分」と言いました。洋服の色や飾りなど、友達とその子を彷彿とさせる絵でした。友達との別れを静かに受け止めるその子の気持ちひしひしと伝わってきました。子どもたちのさまざまな思いを、素直に受け止められるようになりたいと思っています。

また、プレールームには、付き添いのお母さんが一緒に来室することがあります。お洗濯の間だけ小さな子を見ていてほしい、という場合もあります。子どもの病気で胸を痛めているお母さんたちにとっても、ほっとできる場になるように心がけたいと思っています。

チームワークを大切に

遊びボランティアは、子どもにとっては、家族でもなく医療スタッフでもない、曖昧な、中間的

な存在かもしれません。その分、「つなぐ」存在であれたら、と思っっています。ボランティアとの時間を楽しみに、苦手な薬を我慢して飲んだり、頑張つて食事をしたりする子もいるそうです。子どもの気持ちを周囲に伝えたり、周囲の大人の気持ちを子どもに伝えたりするような直接的なかわりだけでなく、子どもが周囲とかかわる時のきっかけになるような役割が果たせるとすれば、それは本当にうれしいことです。

また、中心で遊ぶ人、その輪に入れない子と遊ぶ人というように、スタッフ同士や常勤の保育士さんとの間で役割を分担し、全体のバランスを感じ取りながら活動をしたいと思っっています。

大学の同窓会が母体となっているボランティアなので、考え方の背景に共通項があるからでしょうか、たくさんの言葉を費やさなくても以心伝心で伝わること、理解し合えることがあります。子

どもに「どうしてそんなに仲がいいの」と聞かれたこともあります。人との関係に懐疑的だったその子にとっては、家族でも同級生でもないのに、お互いに理解し合い、信頼し合っているスタッフ同士の関係がとても不思議に感じられたのかもしれない。

私たちボランティアのできることは、ほんのわずかです。でも、日常の中で遊びボランティアへのアンテナを張っている時、当日に向けて準備をしている時、実際の活動の時、私たちはいつも子どもたちの病気の快癒と健やかな育ちを祈っています。大切なのはそうして祈る気持ちかもしれません。子どもたち一人ひとりが、病棟の中でもその子が本来もっている力を発揮し、健やかに育つ、その支えのほんの一部になれば、と願っています。